

〔植物ニュース〕

ヤクシマヒメアリドオシラン *Vexillabium yakushimense*

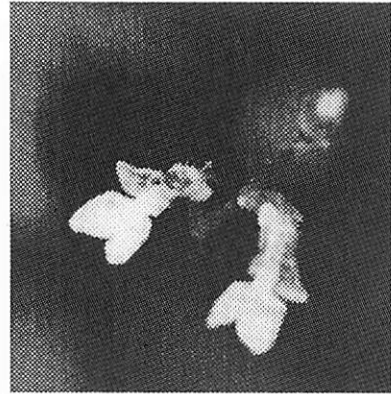
先年木曽谷の南部で採りハクウンランの名で「長野県植物誌」の資料として納めておいた小形の草本はヤクシマヒメアリドオシランであると、ラン科を分担しておられる信州大学の井上健博士に指摘された。

最初にこの草本を写真に納めたのは1984年8月8日であった。この日はムラサキニガナを見ようと楯 誠治氏を誘って大桑村阿寺溪谷へ入ったのである。この草本は県内には稀で木曽谷でも前に2ヶ所で見えていたが花期を外れていたため撮影も採集も行っていなかったのである。この日も山道を歩いて前に見たと思われる所を捜したが見当たらなかったため帰途につき、山道を外れて針葉樹林内（標高700m）の薄暗い所で岩上のコケに混ざっている小さな草本を見つけて撮影した。

続いて同月17日にも、この谷に入り前に見えていた所でこのランを撮影し、2人で2点ずつを採取したのが標本として残っている。その後1989年8月12日には今井建樹氏も加わって同地に入ったが、「信州の野草」に載せているのはこの時の写真である。

これより先1977年7月31日楯氏とサクライソウを見ようと南木曽町柿其の落葉樹林（標高600m）で採ったのはアリドオシランの名で納めておいたが、これもヤクシマヒメアリドオシランであると井上博士によって訂正されている。なお前にある村人からそのような物は、のぞきど高原にもあると聞いていたので去る8月22日その方の案内で赴いたところ、それは南木曽与川宇礼の山地で、のぞきど高原に続く標高850mの赤松林であった。点々と何個か見られたが花をつけたものは1個であった。これを撮影し採品を標本として納めておいた。これによって木曽谷の3ヶ所で確認したことになる。

確かなのは以上の3ヶ所であるが、1977年9月22日山口村賤母国有林（標高330m地点）で花の終わったのを見てアリドオシランと野帳



に記録しているのも、分布上からみてヤクシマヒメアリドオシランである可能性が大きい。

また先頃から大桑村の植物をまとめてみようと野帳を調べているが、1972年8月28日、静岡大学の志村教授を案内して大桑村長道川の谷を歩いて標高700m地点でアリドオシランと野帳に記してあるのも阿寺溪谷に近いのでヤクシマヒメアリドオシランであったとみることが出来る。

これをハクウンランとしたのは花形を重視せずに分布からみてのことであったと考えられる。ヤクシマヒメアリドオシランは屋久島で命名され、その分布は大隈半島から南の暖帯から亜熱帯にかけてであるが、ハクウンランは本州に広く分布し、本県でも軽井沢町矢ヶ崎山標高1100m、御代田町石尊山1000m、富士見町落合、波田町黒川での標本が保存されているので、木曽のものもこれである可能性が大きく、次に述べるように写真にも写っている。

なお前に述べた1984年8月17日に阿寺溪谷で写した写真の中に花形がハクウンランと見られるものが2枚と1989年8月12日に楯氏が同地での写真がある。もしこれがハクウンランとすれば同地は両種の混生地となる。

鹿児島県南部からフィリピンにかけて暖帯から亜熱帯に分布し常緑広葉樹林に生えるというこの草本が木曽谷の標高850mの高原までの針葉樹林・落葉樹林下に生えるという点は甚だ興味深いものがある。中間の四国・紀伊半島での調査に期待したい。（奥原弘人）